

大地はまさに眠らんとす

あゝ空のはてに

夕焼はなづみつ

永遠のたましゐぞよりそひ

默せる鳥、二羽

コバルトは優しくなげきぬ。

○

夕暮の雲は眞赤に

釣する子等は夕焼を唄ひ

山寺の鐘は遠く／＼響き渡り

案山子は黙し

鳴子は風幽に渡り

鳥は一聲鳴きて飛去る

○

「寂寥」はまた來りぬ

しづかなる

夕暮をしたひて

寂寥はまた秋に來たりぬ

あゝ鳥の瞳にも

我が蒼ざめし顔のうつるや。

○

行きくれし

曠野の果の野の果の

青い星にてらされて

枯枝になく旅がらす

郊外の夕

秋 永 露 翠

汽笛が鳴る

ものすごい鐵のドアが開かれる、

ごよめきの聲

蠢動の響

勞動につかれた一群がはき出されてゆく、

けたゝましい音と共に

あざけるやうに

オートモービルが走る、

そのガソリンの臭氣の中から

繩ノレンの燈火が

力なげに黄い人ごみを照して居る。